

レエモン ラジィゲ

堀辰雄

青空文庫

「何よりもまづ獨創的であれ。」しばしば發せられるこの忠告は、凡庸な詩人たちのところでのみ役に立つ。凡庸でない詩人たちはそれを必要としないのだ。そして多くの凡庸な詩人たちがダダの亞流になつた。何よりも獨創的にならうとする努力、そこに今日の詩人たちの共通の弱點——奇矯にすぎること——があると云つてよい。ところでそれとは反對に、ラジイゲは我々に忠告するのだ、「平凡であるやうに努力せよ」と。

平凡であらうとする努力、これくらゐラジイゲの作品を貴重にしたものはなかつたのである。

ラジイゲの持つてゐる平凡、——この一點を中心にして僕は

きな感動をもつて一つの圓周を描かう。

ラジイゲは一九〇三年六月十八日に生れ、そして一九二三年十月十二日に二十で死んだ。

ラジイゲは死んだが、それと同時に、彼の詩人としての生涯は始まつたと言つてよい。何故なら彼は三冊の著書を残して行つたからだ。一つの詩集「火のやうな頬」と、二つの小説「憑かれて」と「ドルジェル伯爵の舞踏會」と。そしてその詩集は人々をして彼のことを「二十世紀のロンサアル」と呼ばしめるに充分であつ

たし、十六と十八の間に書いた「憑かれて」はコクトオによつて
コンスタンの「アドルフ」に比せられ、十八と二十の間に書いた
「ドルジェル伯爵の舞踏會」は「一九三五年を豫想してスタンダ
アルによつて書かれた『プランセス・ド・クレエヴ』だ」と評さ
れてゐるほどである。

だから世間が彼のことを神童扱ひにするのは無理もない。だが
彼は「神童」といふレッテルを貼られるのをひどく厭がつた。そ
して彼はそれについて抗議までした。「年齢なんか何でもないので
だ。ランボオが僕を驚かせるのは、ランボオの作品であつて、彼
がそれを書いたときの年齢ではないのだ。すべての偉大な詩人は
十七で書いた。最も偉大な詩人はそれを忘れさすことの出來た人

達だ。」コクトオもまた「ドルジエル伯爵の舞踏會」の著者を辯護して「日附のない本の年齢のない著者」と呼んでゐる。

僕はラジイゲの「神童」といふ言葉に對する嫌惡を理解できる。彼は「神童」といふ言葉の含んでゐる早熟さ及び異常さを彼自身の才能に結びつけられることを恐れたのだ。なるほど、ラジイゲの才能には、「神童」特有の早熟さとか異常さとか云ふものは少しもないのだ。コクトオの言ふやうに、彼がランボオより以上に我々を驚かすのは、その異常さの皆無によつてだ。ラジイゲの才能は一見すると平凡のやうに見えさへするのである。

さういふラジイゲの祕密を見抜くために、僕は「舞踏會」の中から彼の一句を引用しよう。

「すべての年齢はその果實を持つてゐる、それを揉ぎとることを知らなければならぬ。だが、青年等は大人にばかりなりたがる、そして彼等の前に差し出されるものを輕蔑するのだ。」

ところで、ラジイゲは自分の年齢を正確に知つてゐたのだ。彼の作品は、それを書いた彼の年齢のよく熟した果實だったのだ。そしてそれには少しも未熟なところがなかつたのである。

我々は、大人にばかりならうとしないで、我々自身の年齢を正確に知らなければならぬ。

僕はさつき「最も偉大な詩人はそれを書いた年齢を忘れさすことの出来た人達だ。」といふラジイゲの言葉を引用した。そして年齢を忘れさせるためには、年齢を正確に知ることが大切であるといふ結論に達した。この結論は我々に、我々がどうしても我々自身の年齢から逃れ得ないことを示してゐる。

ラジイゲは彼の年齢の果實を揉ぐことによつて、「神童」特有の異常さからは逃れ得た。しかし彼も、彼の年齢に特有な「羞恥」からは、「隠し立て」からは逃れ得なかつたことを、僕は告發する。それから又、その「羞恥」とか「隠し立て」から彼の作品の大きな特色が生れてゐることをも。

「憑かれて」にしろ、「舞踏會」にしろ、僕がラジイゲの小説を

讀んで最も深く感動したところは、それが純粹の小説であることにある。即ち、その中で作者は少しも告白をしてゐないのだ。さういふ少しの告白もない、すべてが虚構に屬する小説こそ、僕は純粹の小説であると言ひたい。そして僕は近頃さういふ小説にだけしか興味を持つてゐないことを告白する。そこでラジイゲの小説だが、ことに「舞踏會」のごときはその有する純粹な、そして露骨なくらゐの心理解剖によつて、實に僕を感動させたのである。それと同時に、僕はさういふ純粹な小説を書いたラジイゲの製作心理に考へを及ぼして行つたのであるが、そこで圖らずもラジイゲの偉大な「羞恥」に觸れた。そして「羞恥」といふものがいかに貴重であるかを僕は始めて知つたのである。

ラジイゲが「乾燥^{セック}」であるといふ世間の非難に對して、コクトオは答へた。「彼は固い心臓をもつてゐた。そのダイヤモンドの心臓はごく僅かな接觸には反應しなかつた。それには火か、他のダイヤモンドが必要だつたのだ。」

僕の意見によれば、乾燥は彼の表側であり、羞恥は彼の裏側なのだ。

ラジイゲが生きてゐたのは、丁度、戦争から歸つたばかりの、疲勞した、そして彼等にとつてはすべてが墮落の機會であつたと

ころの、青年達の間だつた。ラジイゲは彼等の眞中を通り抜けた。しかし彼は彼等の生活には仲間入りしなかつた。そしてひどい近眼の彼は、片目金ごしに、その固い視線を、「存在を分裂させるやうなリズムをもつた音楽に、意識を失はせるアルコールに」身をまかせてゐる彼の友人達の上に注いでゐた。彼の生眞面目な、子供らしい顔の上には、一種の我慢できないやうな表情が浮んでゐた。

さういふ無秩序の中にあつて、ラジイゲのやうに平靜な態度を
持し得たことは何といふ劇的效果だ！

ラジイゲの「舞踏會」とポオル・モオランの「夜開く」とを比較するがよい。ポオル・モオランは社會の無秩序そのものを忠實

に描寫した。しかしラジイゲはモオランのやうに無秩序の前に頭を下げなかつた。勿論、彼も正確な心理解剖をするためには、人物をそのの屬する社會の額縁の中に入れなければならぬことは百も承知してゐた。だがそれは風俗描寫そのもののためにはないのだ。「ある感情の展開に必要なアトモスフェア」を作り出すためなのだ。

だからそこにラジイゲのやうな靜かな藝術が存在し得たのである。

ジャック・リヴィエールはラジイゲの心理解剖に「新しい発見」のないことを非難してゐるさうである。なるほど、ラジイゲの心理解剖にはゆる「新しい発見」はないかも知れない。そしてそこにあるものは恐らく普通の心理だけであらう。だが、普通の心理がこれくらゐ正確に、そして高尚に描かれたことは嘗て無かつたのだ。そしてそれだけが、ラジイゲの小説にあつては、問題だ。彼が「舞踏會」の中で書かうとしたところのものを知るために、我々はその書出しの數行を讀まう。

「ドルジェル伯爵夫人のそのやうな心の動きは時代遅れなのだらうか？　このやうな義務と優柔不斷との混合は、今日では殆ど信じがたく思はれるかも知れない。……それは寧ろ、放蕩無頼ほ

どの面白味を與へて呉れさうもないからと言つて、我々が純潔さと云ふものにあまり注意を向けてゐないからではないか？ が、純潔な魂の無意識的ならくりは、悪癖の組み合せよりも、もつと特異なのだ。」

そしてこの「舞踏會」が我々を感動させるのは、それに描かれてゐるごく普通な感情の特異さによつてだ。

そしてそこにいはゆる「古典主義」なるものを發見したいものは勝手にするがいい。

今日の作家達はあまりに「心理の新しい發見」をのみ心がける。それが彼等の作品をしてあのやうな異常さに導くのだ。そして我々の周圍には恐るべき誇張とデカダンスとの作品が積み重ねられ

てゐる。我々はそれから逃れるためには、先づラジイゲの平凡さを理解する必要があるやうだ。

ここにラジイゲの書いた斷片の一つがある。

「……我々は數人のフランス的な藝術家をもつてゐる。畫家たちは親密な對象を描く。音楽家たちはモンマルトルの縁日を散歩する。詩人たち（私は二三人知つてゐる）はもはやアメリカを發見しない、そして常套句は彼等を恐れさせない。一つの機械は他の機械を追ひ出す。やがて、機關車が人生から出て行くだらう。日

曜日、博物館に、より速力のある機械によつて取り換へられた機械を見るため、子供たちを連れて行く。ロマンチスム時代に「ゴシック」といふ言葉が意味してゐたところのものを、今日では

「モダン」といふ言葉が意味してゐるのだ。そしてヘンリー・ビドゥ氏がいみじくも言つたやうに、『アメリカン・バア、タンゴ、マオリ族の刺青が我々の時代に於けるのは、月光、廢塔、トゥルバドウル詩人の胡弓がロマンチスムに於けるごときものだ。そしてロマンチックな大作品の中にはそれらを思ひ出させるやうなものゝは殆ど何もないのである。』

ミュツセはロマンチスムを氣にしないで彼の作品を書いた。同様にジャン・コクトオはモダアニスムを狙はないで書く。彼には

薔薇を嗅ぐことを許されるに充分な新しさがあるのである。」

ラジイゲは病院で「舞踏會」を校正しながら死んだ。人は死ぬ前にはあらゆるものを知り得る、といふことはどうも眞實のやうだ。ラジイゲはその好い例である。あらゆる人間の心理を見抜いてゐなかつたならば到底書けなかつたであらうと思はれる。「ドルジェル伯爵の舞踏會」は確かに死に値ひするものだつたのだ。僕等は彼の夭折をいたづらに嘆くのを止めよう。

ラジイゲ自身もまた彼の死を豫感してゐたらしい。

彼は死の三日前に、枕元にゐたコクトオに、彼の最後の言葉を云つたのである。

「あと三日すると僕は神様の兵士達に銃殺されるんだ。」

附記。この小論文はアンリ・マシス氏に負ふ所の多いものである。

青空文庫情報

底本：「堀辰雄作品集第五卷」筑摩書房

1982（昭和57）年9月30日初版第1刷発行

初出：「文学 第五号」第一書房

1930（昭和5）年2月1日刊

※初出時の表題は「レエモン ラジゲ」。

入力：tatsuki

校正：岡村和彦

2013年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

レエモン ラジィゲ

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>